

## 審査の結果の要旨

氏名 小寺 智津子

本論文は、ガラス製品分析を通じて弥生社会の様相に新たな考察を行うとともに、列島外のガラス製品と比較検討し、弥生社会の対外交渉を、ひいてはアジア全体の交流をより明らかにしていくことを目論むものである。

第1部1章ではガラス研究上の問題点について注意を促している。2章では管珠・勾珠の検討から中期後葉の西日本では北部九州の地域と後期後葉から終末期の丹後を中心とした地域の存在を明らかにした。3章では釧が列島外からの搬入品であり、各地の首長が独自に大陸から入手したと見なした。4章では漢からの下賜品である北部九州の璧がガラス製であるがやはり価値が高いことを示した。5章では当時の対外交渉や国内の地域間の交渉の様相が小珠の分布に反映されていることを指摘した。中期後葉の北部九州、後期後葉の山陰・丹後の三地域が独自に対外交渉を行い入手したガラス製品は首長の権力基盤を示す威信財であり交易を基盤とした社会の隆盛と衰退を明白に示す遺物であるとする。

第2部1章では朝鮮半島弥生併行期である原三国時代のガラス管珠は朝鮮半島における製作を想定する事は困難であり、今後製作地を検討する必要があるとした。2章では漢帝国における活発なガラス製品の流通の様相と弥生社会におけるガラス製珠類の豊富さと多様性から、漢帝国のガラス製品交易網の末端に弥生社会が属していたことを指摘した。3章ではカリガラスの検討から、その交易に既に弥生社会が関わっていた東アジアから東南アジア、南アジアをつなぐ当時のダイナミックな対外交渉の様相を明らかにし、アジアのガラス小珠の生産や流通に弥生社会が大きな影響を与えた可能性も示唆した。4章では、中国の戦国時代から漢代にかけてのガラスには広範囲の多様な鉛鉱山の鉛が使用されており、鉛同位体比から製作地と遺物を結びつけることが困難であり、弥生時代のガラス製品の搬入先についても、鉛同位体比から製作地を想定することの困難さを指摘した。

終章では、以上のガラス製品の分析を基礎に、弥生文化が大陸からの働きかけの中で東アジア社会に参画していく動きを、そして中期と後期の画期、後期の中葉と後葉を分ける画期は大陸の動向が背景にあったことを示した。

本論文は一般的な考古学的な分析手法以外に、製作技術、成分分析などを加え総合的な見地からガラス製品を検討したもので、それによって初めて明らかにし得た成果が示されている。これまで時代別、地域別に行われてきた研究を統合することで得られた成果が大きいことも特筆されよう。これらにより、弥生時代ガラス製品を東アジアの中で位置付けることに、ひいては弥生時代社会の特質を明らかにすることに成功している。広域にわたる総合的分析ゆえに逆に検討が不十分のところも見られるが、本論文が弥生時代のガラス製品を考える上できわめて重要な論点を提示していることに疑問はない。よって、審査委員会は一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。